

一第8編一 巨大神殿の圧倒

カイロからナイル側に沿い、遙かアスワン^{*1}に向かって鉄路で南下する途中にルクソール^{*2}がある。古代エジプトの都テーベがあった場所だが、砂岩による巨大な石積み神殿の遺跡がいくつも残されている。サウジアラビアでの仕事が一且終って、いつものようにカイロに滞在していた。アテネに一年暮らしアクロポリスを見慣れた我が目にとって、いずれの遺構にもギザのピラミッド同様、とうてい人力で作ったとは思えない圧倒的なスケールと空間に驚き、言葉を失った。

それは1979年の初夏のことだった。不幸にも数十年に一回という大雨に見舞われた。冷房が切れた窓の開かない列車の中に閉じ込められた我々乗客は、どうしようもない熱気と臭気が充満する列車の中でひたすら寝て待つしかなかった。そんな歴史的トラブルの後にたどり着いた炎天下の古代遺跡である。それだけに、開放感に満ちた



図版08-1 ラムセス2世の中庭(第1中庭)

喜びはひとしおであった。

ルクソールといっても、その古代エジプトの遺跡群を擁する地域は広大だ。中央をナイル川が真っ直ぐ滔々と南北に走る。当時は橋がなかったから、渡り船で東西両岸を往復しながら訪ね歩いた。ナイル川は主に観光や農業で生計を立てる現地の人々にとって、生活の大動脈である。そんな媚びない日常と隣り合わせの観光が心地よかった。日が沈む西岸は「死」を意味するが、そこに作られたツタンカーメンの黄金マスクが発見された王家の谷も、王妃の谷も、気の遠くなるほどの昔の物語に遺構を目の前にしても、リアリティーは遠い。そんな感覚がもどかしかった。

一方、日が昇る側の「生」を意味する東岸のルクソール神殿は違った。入口に1本のオペリスク(もう1本は19世紀初めにフランスに贈られ、パリのコンコルド広場に立つ)、内部には巨大なラムセス2世像^{*3}との彫刻と列柱が整然と、しかし力強く立ち並ぶ。それも、19世紀以来の発掘によってその全貌が明らかになった。確かに丘の上のアクロポリスは美しい。その抽象化された形態と、目の錯覚を利用した遠近法の理詰めな操作はその後の建築に多大な影響を与え続けた。しかし、そんな理屈を凌ぐ規模とオリジナルが持つ力強さと迫力にはかなわない。発掘の終わった神殿の姿にそう実感させるほどのリアリティーがあった。



図版08-2 ナイルの渡し船の男

*3
Rameses II
(BC1314~BC1224). 古代エジプト第19王朝のファラオ

*1
Aswan, エジプト南部の都市で、アスワン県の県都

*2
Luxor, エジプトの都市で、ルクソール県の県都